

城下町における都市の景観復元に関する課題

— 滋賀県長浜市を事例に —

中西和子

- I. はじめに—長浜の歴史と町おこし活動の概要
- II. 行政と市民サイドの温度差—「黒壁銀行」保存をめぐる
- III. まちづくり役場の活動—「北近江秀吉博覧会」の後
- IV. 観光地と歴史的景観保存の相克
- V. おわりに

I. はじめに—長浜の歴史と町おこし活動の概要

現在のわが国では、景観を地域の資源として、全国規模で保全・復元運動が盛んである。今回報告する滋賀県長浜市も、行政と市民サイド（第三セクター「黒壁」とNPO「まちづくり役場」が中心）それぞれが町並みおよび景観の整備・復元を推し進め、地域の活性化が図られた事例である。“秀吉のまち・長浜”を主たるモチーフとしたこれら一連の活動により、かつてのさびれた中心市街地は変貌を遂げ、現在において「観光地としての長浜」は一つの全国ブランドになっているといっても過言ではない。

長浜市は琵琶湖の北東部に位置し、人口84,516人（2006年8月）を擁する滋賀県内の中堅都市で、現在でも、JR北陸本線・国道8号線・北陸自動車道（長浜ICより10分）によって近畿・北陸・東海3地域の結節点と

なっている。

長浜の歴史をみれば、中世より琵琶湖水運・真宗信仰の拠点として湖北エリアの中心地の機能を有しており、都市としての成立の契機は天正2（1574）年の戦国武将豊臣秀吉による城下町建設がそれにあたる。なお、天正10（1582）年に秀吉が去った後、柴田氏、次いで山内氏が入るが、その後天正18年、同地を支配した石田三成が佐和山城を築くとともに湖北支配の中心地としての機能を失う。元和元（1615）年に長浜城は廃城となり、近世の長浜はちりめんを中心とした在郷町もしくは北国街道の宿場となり、明治・大正にかけて繁栄する。なお、明治2年に琵琶湖に蒸気船が就航し、同15年に長浜・金ヶ崎（敦賀）間、同16年に長浜・関ヶ原間に鉄道が開通すると、長浜は鉄道から琵琶湖水運への積み替え港として、ある意味では最も繁栄したというべき時代を迎える。

しかしながら、昭和のいわゆる糸へん不況や、また、高度経済成長後の生活様式の変化により長浜の町全体が経済的地盤沈下にみまわれる。これはどの地域でも共通する一般的傾向でもあるのだが、とりわけ、モータリゼーションに伴う郊外大型店の進出によってかつての城下の中心であった商店街が受けたダメージは著しいもので、昭和50年代には「1時間で往来したのは人間4人に犬1匹」¹⁾といわれるような状況にあった。これは市当

キーワード：城下町，長浜市，町おこし，歴史的景観，観光地化

表1 長浜における町おこしの動き

	行政の取り組み	市民サイドの活動	黒壁の動き
昭和58年	長浜城歴史博物館開館 (建設に市民の寄付が4億3千万円) 旧長浜駅舎鉄道資料館開館	風格あるまちづくり市民会議設立(昭和57年) 「風格賞」表彰制度を創設 第1回長浜出世まつり開催 観光ボランティアガイド協会結成	
昭和59年	長浜市博物館都市構想を策定 うるおいのある橋づくり事業開始	北びわこ花火大会「ありがとう花火」はじまる 米川支流環境づくり協議会結成 第1回きもの大園遊会開催	
昭和60年	長浜の迎賓館・慶雲館の昭和の大改修 第1回びわこアイアンマン大会開催		
昭和61年	表参道と大通寺整備に着手 (石畳化・雁木方式の統一ファサード・橋の修景・駐車場整備・まちかど広場など) 美しい観光地づくり事業補助制度創設	都市緑化功勞建設大臣賞受賞 (長浜東ロータリークラブ)	
昭和62年	国友鉄砲の里資料館開館 (運営は自治会委託) 第1回生け垣コンクール	第1回芸術版楽市楽座AIN開催 住民による近隣景観形成協定(第1号今町) 観光物産センター「お花館」オープン 抱きしめてBIWAKO開催 市へ黒壁銀行の保存要望 (市は「ニセクでなら」と意思表示)	
昭和63年	北国街道整備事業開始(～平成4年)	北国街道うまいもん処「うだつ会」結成 長浜ひょうたん会結成、長浜愛鶴会設立	第三セクター黒壁設立(資本金1億3千万円) 土地建物を買い戻す。(長浜楽市オープン)
平成元年	建築デザインマニュアル 「長浜らしさをつくる」作成 都市デザインアドバイザー制度創設 ながはま御坊表参道完成	ふるさと情報誌「長浜みへな」創刊 ながはまアムニエティ会議結成 市民国際交流協会結成 大通寺を守る会結成	・黒壁ガラス館オープン (1～4号館・黒壁スクエア)
平成2年	曳山子供歌舞伎三役修業塾開講 曳山博物館建設検討委員会発足	ギャラリー楽座オープン 北国街道町衆の会発足 北国脈往還再見会議設立 パソコン通信ホスト局「蔵ネット近江」開局 長浜南部メルヘン祭り開催	・5号館「札の辻本舗」オープン
平成3年	JR北陸線の直流化実現 北近江・西美濃ふれあい協議会設立 全国曳山子供歌舞伎サミット開催	びわこ湖北路ロマン・ルネサンス・フェスティバル開催 市民が創作ミュージカル公演 「北国街道を守り育てる住民協定」締結	・6号館「ギャラリー・マヌー」オープン ・7号館古美術の店オープン ・8号館郷土料理の店オープン
平成4年	長浜ドームオープン びわこ長浜ワンデーマーチ開催	アジサイづくり「虹の会」結成 (日本一のアジサイ園づくりへの市民の動き)	・増資3億円(資本金4億3千万円に) ・10号館ガラス鑑賞館オープン ・11号館ステンドグラス館オープン ・12号館太閤ひょうたん館オープン
平成5年	曳山子供歌舞伎アメリカ公演 びわこ長浜ツーデーマーチ始まる まちづくり活動集「長浜物語」出版	北国街道が都市景観大賞を受賞 日本旅のベンクラブ「旅ベン大賞」を受賞 長浜デザイン工房開元気やオープン 「風あいのあるまちづくり事業」(国友町)	・13号館ガラス研究室オープン ・14号館レストハウス洋屋オープン ・16号館分福茶屋オープン ・オーストリアのラッテンベルグ市と ガラス街道提携
平成6年	新・博物館都市構想を策定 全国地域づくり交流会議(自治省)誘致	大相撲「長浜ドーム場所」誘致 寅さん映画「男はつらいよ47作」を誘致 「寅さんに会えそうな町づくり委員会」結成	・15号館「クラブ」オープン
平成7年	SL北びわ湖号運転開始(季節運転) 大通寺保存再生調査	博物館通り街なみ環境整備事業開始 生活工芸館「テオリア」オープン	・17号館ラッテンベルグ館オープン ・18号館レストハウス「和屋」オープン ・20号館和菓子の店オープン ・21号館「ロココ」オープン
平成8年	官民あげて「北近江秀吉博覧会」開催 ・行政は交通対策、駐車場対策を担当 ・運営は全て市民実行委員会で ・入場者は82万3100人	「北近江秀吉博覧会」開催 ・500人のボランティア動員 ・利益金5800万円は市へ寄付 地ビール「長浜浪漫ビール」オープン 第1回豊公まつり開催 石田三成フェスティバル開催	・19号館ステーキの店オープン ・第1工房「アネックス」オープン ・北国街道に「夜夜門」設置 第1回ぶつぷつ交換らくらく市開催
平成9年	曳山博物館基本設計に着手 商工会議所が中小企業庁の「空き店舗対策事業(3店舗)」に取り組み 湯布院観光協会から職員研修生受入れ(2年)	プラチナプラザ(4店舗)オープン 小堀遠州を顕彰する「長浜遠州会」設立 近畿むらおこし物産展開催 日本古式地術サミット開催 全国学生邦楽フェスティバル開催	・22号館「そば八」オープン ・23号館焼肉の「きおん」オープン ・ロマネスク館オープン ・出島塾開講 ・愛知県瀬戸市から職員研修生受入れ(2年)
平成10年	曳山博物館実施設計に着手 北国街道安藤家屋敷公開 長浜城歴史博物館入館者250万人突破 長浜市中心市街地活性化計画	まちづくり役場開設 北国街道に成田美術館開館 北国街道郷土資料館開館	・24号館「ほっこくがま」オープン ・25号館観光物産館「納安」オープン ・岩手県江刺市の納安船に出店 ・まちかどフェスタ開催
平成11年	長浜市総合計画	ゆう壺番御堂前地区整備	・26号館ワインの店「ラ・フェル」オープン ・感響フリーマーケットガーデンオープン
平成12年	曳山博物館オープン 博物館通り街路事業完成	博物館通り街なみ環境整備事業完成	・27号館あゆの店「きむら」オープン ・28号館「小牧かまぼこ」オープン
平成13年			・ピアルレーチェ(灯りの並木道)始まる
平成14年			・岩手県江刺市の納安船から撤退 ・国際シンボ「文化資本と持続可能な都市の再生」開催
平成15年		まちづくり役場、NPO法人になる 『黒壁と町衆の15年』出版	・ガラスブランド「Reflection Kurokabe」発表
平成16年		町屋SUCCE横町オープン	

(まちづくり役場提供資料をもとに作成)

局としても看過できる問題ではなく、まず中心市街地の活性化を図るべく、さまざまな試みを行う（表1参照）。

市はまず、昭和58年にかつて廃城となった長浜城の再建に着手し、長浜城歴史博物館としてオープンさせる。この建設に際しては市民の寄付4億3千万円が集められ、同時に旧長浜駅舎も鉄道資料館として運営が始まる。次いで翌59年に長浜市博物館都市構想を策定、平成6年の新・博物館都市構想の策定を経てこの行政サイドの取り組みに市民サイドも呼応し、かつて城下であった市域の中心部は、

1. 湖岸の長浜城周辺エリア（行政中心）
2. 旧城下の商業地エリア
（市民サイドー黒壁中心）
3. 長浜御坊の門前町を中心としたエリア
（市民サイドー非・黒壁中心）

の大きき3つにわかれて町並み整備がすすめられ、現在に至っている。

II. 行政と市民サイドの温度差—「黒壁銀行」保存をめぐる

しかしながら、一見、博物館都市構想にのっとった行政・市民サイドの協働による観光地化を基本とした「まちなみ整備・景観保全→まちおこし」がすすめられたかに見えるが、実態はかならずしもそうとばかりはいえない。

昭和62年、北国街道と大手門通りの交点に立地する通称「黒壁銀行」の保存を市民から長浜市に要請した際、行政の対応は遅れた。最終的には翌63年、第三セクターの「株式会社黒壁」（以下、「黒壁」）が設立され建物は保存されることとなったが、これを機に行政と市民サイドは若干異なる「まちなみ整備・景観保全→まちおこし」の道を進むこととなる。

現在、旧城下町エリアのなかで、最も多くの観光客を集めている一角が「黒壁スクエア」と呼ばれることからわかるように、これこそ、「黒壁」が中心となって整備がすす

められたエリアであり、実態としては黒壁の建造物をモチーフにしたお洒落な商業地といったところである。空き店舗の活用を手がけ、時代モチーフは、秀吉時代の城下町にあるというより、近代以後に長浜が最も繁栄した明治・大正期となっている。また、長浜が「成功したまちおこしの事例」として研究対象にされるのは、概ねこのエリアを事例にしたものであることが多い²⁾。ここでは、表1にみるように、「黒壁銀行」の他にもいくつか残っていた黒壁の建造物を、ガラス工芸とオルゴールを中心とした店舗および飲食店として改造し、集客を図っている。

III. まちづくり役場の活動—「北近江秀吉博覧会」の後

前述のとおり、観光地としての長浜の成功を実質的に支えているのは「黒壁」の企業活動であるといってもよいのだが、その中から、NPO法人である「まちづくり役場」が派生し、現在、精力的に活動していることに触れておく必要があるだろう。

同団体は、平成8年の「北近江秀吉博覧会」開催の際に動員された市民ボランティアメンバーを中心に、平成10年、博覧会事務局として使った金物店の建物をそのまま事務局として利用するという、いわば博覧会の後継事業として創設されたNPO法人である。主な活動内容は、プラチナプラザ事務局の運営、感響フリーマーケットの運営、「黒壁」から委託された視察の受け入れ事業、観光ガイドおよび黒壁パスポートの販売事業、黒壁グループ協議会事務局の運営等があり、あわせてKBS・BBCでテレビ・ラジオによる情報発信および出版業務も行なっている。

「まちづくり役場」は「黒壁」から派生した団体であり、活動内容のほとんどが「黒壁」およびその関連団体から委託を受けたものであって、社員の出向・派遣などで人的にも経済的にも経営上の相互依存関係があるこ

とに間違いはないのだが、ここが、市民の声をとりまとめる機能を持った存在であることの意義は大きい³⁾。また、「まちづくり役場」には、全国の自治体などから職員が長期研修に訪れ、これらの活動が単なる商業的に成功したまちおこしの事例としてではない長浜の宣伝に重要な役割を果たしていることを評価すべきであろう⁴⁾。

IV. 観光と歴史的景観保存の相克

以上で、長浜における行政と市民サイドの取り組みを見てきたが、ここで観光地であることと景観保存に関する問題について述べたい。

まちの経済的地盤沈下に対する手段として、長浜では行政・市民サイドともに観光地化による活性化を選択した。しかしながら、両者の取った具体的な手法は異なった。

行政は、近世初期の「秀吉の城下」を主たるモチーフに長浜城歴史博物館に代表される、いくつかの博物館を建設した。しかしながら、お城や鉄道資料館が完成しても観光客はさほど集まらなかったし、当然、街の中に入ってもこなかった。中心市街地の活性化には直結しなかったのである。また、「黒壁」の活動によって長浜が観光地として認知される現在にいたっても、お城や鉄道資料館に観光客はさほど集まらないという状況は改善さ

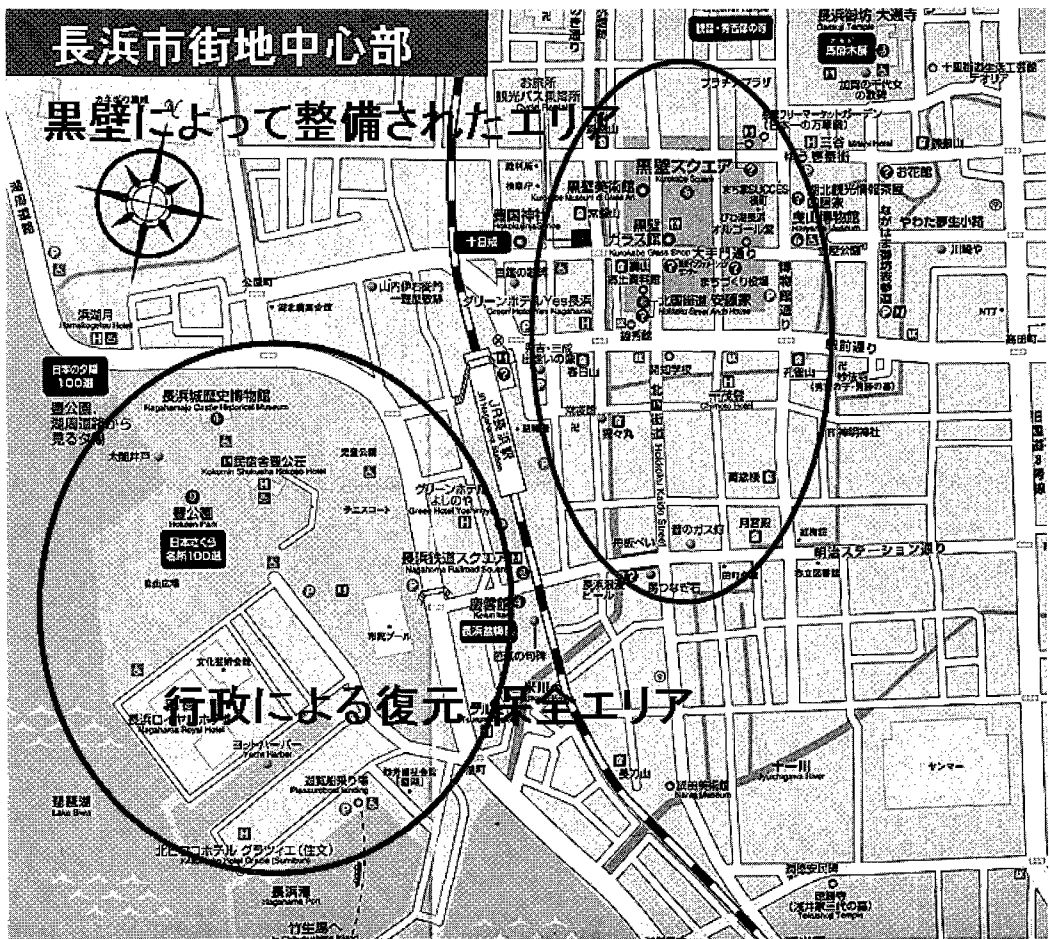


図1 長浜市街地中心部「長浜観光マップ」(長浜市観光振興課作に一部加筆)

れていない。

これは第一に、「行政による復元・保全エリア」と「黒壁によって整備されたエリア」とが、JR北陸線および湖周道路によって分断されているという状況によりもたらされていると考えられる（図1参照）。京阪神からJRの新快速で2時間以内（大阪から1時間、30分おきに運行）という長浜のアクセスのよさが、却ってマイナスに作用しているということもあろう。また、「黒壁」のテナントのほとんどが、ガラス工芸とオルゴールおよび飲食店で占められており、女性客をターゲットとしていることは明らかである。これらの条件が重なることにより、長浜は京阪神の女性が「お屋前にやって来て、夕刻前に帰ってしまう手近な観光地」として成立してしまっているのである⁹⁾。これでは、長浜駅の構造上の問題もあいまって、短い滞在時間内で人の流れは勢い、黒壁スクエアを中心とした駅の東側エリアに流れ、またそのままJRで帰宅してしまうのも無理はない。

しかしながら、この黒壁スクエアと呼ばれる一画に関しても、景観保存・復元という観点からみればいささか問題が無いでもない。現在では、「黒壁」のテナントに入居する商店の数は28を数えるが、「黒壁の建造物」であるものは半数以下で、また、テナント以外に新しく「外壁を黒壁に改造・新築」されたものが数多くあるからである。ここでは、過剰ともいえる「創りこみ」が行われており、景観の保全・復元というより、もはやあまりに商業主義が全面展開した、一種の景観創出になっているともいえるからである。

V. おわりに

織豊期に建設された秀吉系城下町は、中世来の都市的基盤をある程度継承しながらつくられることが多い¹⁰⁾。また、それらの都市は歴史を重ねる中で、成立当初の姿を失っているものも多い。都市とは本来そうしたもので

あろう。今回の報告では、長浜市をとりあげ、博物館都市構想をめぐる行政と市民サイド活動について述べたが、このような場合、両者のいわゆる「温度差」がさまざまな課題をもたらすことがわかった。

景観の復元・保全の問題に触れるときは、「誰のためのものなのか」ということを常に念頭においていくことが重要であろうし、途中で「創られてしまった景観」というものに対して、考慮を払う必要があるだろう。

また、観光地化によってまちおこしを図った長浜であるが、平成18年2月の市町村合併によって竹生島が市に編入されたこと、10月にJRの新快速乗り入れが敦賀まで延長され、「終着駅でなくなる」となどによっても、何らかの動きがあると思われる。今後、一層注目したい。

（奈良女子大学人間文化研究科）

【付記】

今回の発表および原稿執筆に際しまして、お忙しいところ資料収集に便宜を図っていただき、なお貴重なご意見をいただきましたNPO「まちづくり役場」の担当の方々に記して感謝をいたします。

【注】

- 1) 「黒壁」をプロデュースした笹原司朗氏の言葉。現在では黒壁スクエアを中心に観光客も含めて年間およそ200万人が訪れるようになっているが、当時の同商店街の衰退は著しいものがあつた。この言葉は多分に宣伝効果をねらった戦略的なキャッチコピーであると思われるが、町づくり役場での聞き取りによれば、正確な統計データはないものの、「当時は1日あたりの往来者は100人を越えることがなかった」というのが住民の実感であり、これらのことは、出島二郎『長浜物語 町衆と黒壁の十五年』（特定非営利法人まちづくり役場、2003）に詳しい。
- 2) 「まちづくり役場」が視察受け入れをした大

学および自治体などによるHPなどで長浜の事例は多くとりあげられている。長浜の場合、自らの広報活動以外に他機関によるこのような宣伝もみられるので、他地域の成功事例とは一線を画した印象が残る。出版物としては代表的なものに、日本建築学会編『まちづくり教科書9 中心市街地活性化とまちづくり会社』（丸善出版事業部、2003）がある。

- 3) 「黒壁」の企業活動は、商店街の活性化に大きな役割を果たしたが、地元住民の意見としては、観光地化してしまった商店街への反発というものも当然存在する。「黒壁」から派生した団体であるNPO法人が、「黒壁」と市民の仲介役としての機能とならんで、市民活動の拠点として機能することの意義は大きい。
- 4) 「まちづくり役場」は、自らの情報発信拠点としてだけでなく、「まちづくり役場にいてだけで全国のまちの情報が入手できます」

(担当者談) というように、全国のTMO団体の情報交換の場としても機能している。平成10年の立ち上げ以来、2000（ピークであった平成11年は400）を超える視察団体を受け入れており、筆者が聞き取りに訪れた際も夜遅くまで視察者を交えてのディスカッションが行われていた。

- 5) 「黒壁」によれば、リピーターが40%とのことである。筆者が現地で、観光に訪れていた女性グループ（計4組）に聞き取りをしたところ、京阪神から来たという3組全てに2～3回目という観光客がいた。彼女らが「長浜行に乗ればそのまま（乗り換えなしで終点まで）着けるので気軽」、「（列車の）ロマンスシートでおしゃべりしながら旅行気分が味わえる」と語ったのが印象的である。
- 6) 拙稿「藤堂高虎の城下町建設にみる織豊期城下町プランの受容と展開」、歴史地理学 42-5、2000、23～40頁。

Problem Concerning Spectacle Restoration in the Castle Town
— A Case Study of Nagahama, Shiga Prefecture —

NAKANISHI Kazuko (Nara Women's University)

Key words: Castle town, Nagahama, Town developmest, Historical lardscape, Tourism development